2015年度　安居次講

ハリバドラの伝える
瑜伽行中観派思想

一郷正道

東本願寺

開　講　の　辞

2015年安居の次講を拝命し折角の機会を賜ったので，学界で未だ熟知されていない資料を紹介し標記講題のもとインド仏教後期の思想の一端を開陳したい。チベットの「学説綱要書（宗義文献）」には頻出する「瑜伽行中観派」なる学派がインドにおいていつごろ存在し，いかなる思想を展開していたかはインド側の文献資料では未だ定かではない。尤も，その学派名は，インドの文献には11世紀初頭になって見られるが，チベットではすでに９世紀初頭に現れている。しかし，インド仏教思想史後期において標記学派名に相応しい思想を担った学者達が存在したことは間違いないと理解する。８世紀のシャーンタラクシタの『中観荘厳論頌』には「〔中観派と瑜伽行派の〕二つの学説の馬車に乗って，教義の手綱を取る人々は，それゆえ，文字通り大乗教徒の地位を得る」（第93偈）との文言があり，当時両学派の思想の交流が盛んであったことが示唆される。その思想の要点は，外界の実在を否定し，一切を唯心に帰し，その心も勝義としては無自性・空である，とする空思想を最終目標とする哲学体系である。しかも，その哲学は，仏教に伝統的な「止」「観」という修行道に裏付けられたものである。インド仏教思想の歴史的発展・展開とは順序を異にし，認識論，修行論の立場から唯識思想を高く評価しながらもそれを方便説と見做し中観思想を最終目標と位置付け，思想の次第向上を語るこの体系にはこの学派の確かな教相判釈を見て取れよう。中観思想との類似性の高い

無相唯識説に対する批判にはとりわけ厳しいものがあることは本安居に提出する資料から明らかになるであろう。

かかる学派の思想を解明する資料としてその学者と作品を挙げればつぎのようなものがある。ジュニャーナガルバ（Jñānagarbha）の『二諦分別論』（*Satyadvayavibhaṅga*），シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita）の『中観荘厳論頌・自注』（*Madhyamakālaṃkāra-vṛtti*），カマラシーラ（Kamalaśīla）の『中観荘厳論細注』（*Madhyamakālaṃkāra-pañjikā*），『中観の光』（*Madhyamakāloka*），『修習次第　初・中・後篇』（*Bhāvanākrama*），ハリバドラ（Haribhadra）の『八千頌般若経解説・現観荘厳の光』（*Abhisamayālaṃkālālokā Prajñāpāramitāvyākhyā*）等である。

本安居には上記，９世紀ハリバドラの『八千頌般若経解説・現観荘厳の光』に見られる瑜伽行中観派の思想と思える箇所を翻訳し，安居テキストとして提出する。その内容の大半は上記，カマラシーラの『中観荘厳論細注』と一致する。ということは，当学派の思想はカマラシーラの見解ですでに完成の域に達していて，ハリバドラはただそれを継承しているにすぎないのかもしれない。カマラシーラのその著作はチベット語訳だけで伝えられていて読解は容易でない。一方，ハリバドラのそれは梵文で残っておりチベット訳もある。両者を突き合わせて読むことによってカマラシーラ，ハリバドラの思想を解明することは，インド仏教後期の思想理解に寄与するところ大なるものがあると確信する。チベットの学説綱要書からの知識は仏教各学派の思想の概要を理解するには簡にして要を得ているが，断片的な文章の寄せ集めによる知識理解に陥ることが危惧される。原文を丁寧に読解しコンテキストを十分に把握し思想解明につとめたい。かかる文献操作によってこそ学説綱要書で伝えられる，ハリバドラが瑜伽行中観派の「形象真実派」の論師なのか「形象虚偽派」の論師なのか，或いはまた「如幻理証中観派」の論師なのか等の真偽を明らかにすることになろう。

2015年７月17日

一　郷　正　道

目　次

開講の辞

文献および略号表

資料について

はじめに……1

第一章　学説綱要書に見られる論師……5

第二章　先行研究から……14

第三章　瑜伽行中観派の論師たちの思想……24

第一節　ジュニャーナガルバ……24

第二節　シャーンタラクシタ……32

第三節　カマラシーラ……36

第四節　ハリバドラ……44

（1）有相唯識，無相唯識批判　44

（2）ハリバドラの思想　56

まとめ……71

資　料

和訳『八千頌般若経解説・現観荘厳の光』……77

文献および略号表

一次文献略号

AAA *Abhisamayālaṃkārālokā* (Haribhadra): Wogihara Unrai (ed.), *Abhisamayālamkār'ālokā Prajñāpāramitāvyākhyā: commentary on Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā*. Toyo Bunko, Tokyo, 1932-1935; Paraśurām Lakshmaṇ Vaidya (ed.), *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: with Haribhadra's commentary called Āloka*. Buddhist Sanskrit Texts no. 4, Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Dharbhanga, 1960.

AAV *Abhisamayālaṃkārakārikāśāstravivṛti* (Haribhadra): Koei Amano (ed.), *Haribhadra's commentary on the Abhisamayālaṃkāra-kārikā-śāstra*. Kyoto: Heirakuji-Shoten, 2000.

BhK I *First Bhāvanākrama* (Kamalaśīla): Giuseppe Tucci (ed.), *Minor Buddhist Texts, part II*, Serie Orientale Roma vol.IX, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1958.

BhK II *Second Bhāvanākrama* (Kamalaśīla): Goshima Kiyotaka (ed.), *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama*, Private edition, Kyoto, 1983.

BhK III *Third Bhāvanākrama* (Kamalaśīla): Giuseppe Tucci (ed.), *Minor Buddhist Texts, part III : Third Bhāvanākrama*, Serie Orientale Roma vol. XLIII, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1971.

LA *Laṅkāvatāra*. Nanjio Bunyiu (ed.), *The Laṅkāvatāra sūtra*. Otani University Press, Kyoto, 1923.

MA *Madhyamakālaṃkārakārikā* (Śāntarakṣita): Ichigō Masamichi (ed.), *Madhyamakālaṃkāra of Śāntarakṣita with his own commentary of Vṛtti and with subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*. Bun-eido, Kyoto, 1985.

MĀ *Madhyamakāloka* (Kamalaśīla): Ichigō [2004] (Pūrvapakṣas); D no. 3887, P no. 5287 (Uttarapakṣas).

MAP *Madhyamakālaṃkārapañjikā* (Kamalaśīla): Ichigō Masamichi (ed.), *Madhyamakālaṃkāra of Śāntarakṣita with his own commentary of Vṛtti and with the subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*. Bun-eido, Kyoto, 1985.

MAV *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (Śāntarakṣita): Ichigō Masamichi (ed.), *Madhyamakālaṃkāra of Śāntarakṣita with his own commentary of Vṛtti and with the subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*. Bun-eido, Kyoto, 1985.

SDVK *Satyadvayavibhaṅgakārikā* (Jñānagarba): Malcolm David Eckel (ed.), *Jñānagarba's Commentary on the Distinction between the Two Truths*. State University of New York, Albany, 1986.

SDVV *Satyadvayavibhaṅgavṛtti* (Jñānagarba): Malcolm David Eckel (ed.), *Jñānagarba's Commentary on the Distinction between the Two Truths*. State University of New York, Albany, 1986.

SDVP *Satyadvayavibhaṅgapañjikā*, D. no. 3883, P no. 5283.

SNS *Saṃdhinirmocanasūtra*. Étienne Lamotte (ed.), *Saṃdhinirmocana sūtra : l'explication des mystères : texte Tibètain*. Bureaux du Recueil, Bibliothèque de l'Université, Louvain, 1935.

SNSBh *Saṃdhinirmocanasūtra-Āryamaitreyakevalaparivartabhāṣya*. (Jñānagarbha): Powers [1998] を見よ。

ほか略号

D sDe rge edition.

P Peking edition.

二次文献

赤羽　律

2004 「究極的真理と世俗の真理—ジュニャーナガルバの二真理説とチベットにおける思想的立場—」『哲学研究』577, pp.80-114.

天野宏英

1964 「ハリバドラの仏身論」『宗教研究』37-4, pp.27-57, 1964。

Gareth Sparham

2006 *Abhisamayālaṃkāra with vṛtti and ālokā - First Abhisamaya*(*Volume 1*), Jain Pub, Fremont, Calif., 2006.

2008 *Abhisamayālaṃkāra with vṛtti and ālokā - Second and third Abhisamaya* (*Volume 2*), Jain Pub, Fremont, Calif., 2008.

2009 *Abhisamayālaṃkāra with vṛtti and ālokā - Fourth Abhisamaya*(*Volume 3*), Jain Pub, Fremont, Calif., 2009.

2011 *Abhisamayālaṃkāra with vṛtti and ālokā - Fith to Eighth Abhisamayas* (*Volume 4*), Jain Pub, Fremont, Calif., 2011.

兵藤一夫

1984 「Bstan 'gyur 所収の『二万五千頌般若』についての二・三の問題—特に『現観荘厳論』との関連において—」『日本西蔵学会会報』30, 1984, pp. 7-12.

2000 『般若経釈現観荘厳論の研究』文栄堂，京都，2000。

一郷正道

1982 「瑜伽行中観派」『講座・大乗仏教 第7巻 中観思想』春秋社，東京，1982, pp. 175-215。

1985 『中観荘厳論の研究—シャーンタラクシタの思想—』文栄堂，京都，1985。

1985 *Madhyamakālaṃkāra*. Kyoto: Bun'eido, 1985。

1989 "Śāntarakṣita's Madhyamakālaṃkāra," *Studies in the Literature of Great Vehicle, Three Mahāyāna Texts, Ed. by Luis O. Gómez and Jonathan A. Silk*, The University of Michigan, pp. 141-240. 1989.

1990 「『中観の光覚え書き』について」『日本西蔵学会々報』第36号，1990, pp. 8-12.

1991 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（1）」『京都産業大学論集』第20巻第2号，『人文学系列』第18号, pp. 229-279, 1991.

1992 "On the Dbu ma snaṅ ba'i brjed tho," *Asiatische Studien Études Asiatiques*, XLVI-1, PETER LANG, pp. 195-211, 1992.

1993 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（2）」『京都産業大学論集』第22巻第3号，『人文学系列』第20号, pp. 104-125, 1993.

1994 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（3）」『京都産業大学論集』第24巻第1号，『人文学系列』第21号, pp. 301-316, 1994.

1995 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（4）」『京都産業大学論集』第25巻第1号，『人文学系列』第22号, pp. 213-241, 1995.

1996 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（5）」『京都産業大学論集』第25巻第2号，『人文学系列』第23号, pp. 248-266, 1996.

1997 「カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（6）」『京都産業大学論集』第27巻第4号，『人文学系列』第24号, pp. 130-158, 1997.

1999 「唯識派の提出するダルミンをめぐって—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（8）—」『仏教学セミナー』第70号, pp. 84-71, 1999.

2000a 「カマラシーラによる所依不成回避の方法—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（7）—」『インドの文化と論理—戸崎宏正博士古稀記念論文集—』九州大学出版会，福岡, pp. 425-455, 2000.

2000b 「カマラシーラの無自性論証と証因（hetu）—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（9）—」『大谷学報』78（3）, pp. 1-20, 2000.

2002 「「信解行地」に関するカマラシーラの見解」『初期仏教からアビダルマへ 櫻部建博士喜寿記念論集』櫻部建博士喜寿記念論集刊行会編，平楽寺書店，京都, pp. 467-482, 2002.

2003 「『修習次第』「後篇」に登場する反論者について」『仏教学セミナー』第78号, pp. 1-23, 2003.

2004 「『修習次第』後篇の研究」『大谷大学研究年報』第56号, pp. 1-67, 2004.

2005a 「『修習次第』中篇の研究（上）」『印度哲学仏教学』第20号, pp. 58-85, 2005.

2005b "A Critically Edited Text of the Pūrva-Pakṣas of the Madhyamakāloka of Kamalaśīla," *Annual memoirs of the Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute*（『真宗総合研究所紀要』），第22号, pp. 75-141, 2005.

2005c 「「直接知」「証因の属性」をめぐって—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（10）—」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』，長崎法

潤博士古稀記念論集刊行会編，平楽寺書店，京都，pp. 315-329, 2005.
2006a 「『修習次第』中篇の研究（下）」『印度哲学仏教学』第21号，pp. 57-83, 2006.
2006b 「プラマーナによる一切法無自性論証—カマラシーラ著『中観の光』和訳研究（11）—」『仏教学セミナー』第84号，pp. 88-65, 2006.
2011 『瑜伽行中観派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』2008年度～2010年度科学研究費補助金基盤研究（C），成果報告書，2011。

磯田熙文
1975 「Ārya-Vimuktisena: Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti(I)」『文化』39-1. 2 , pp.184-158, 1975。

岩田　孝
1981 「Śākyamati の知識論」『PHILOSOPHIA』69, pp.143-164, 1981。

梶山雄一
1975 『論理のことば』中公文庫，東京，1975。
1982 「中観派思想の歴史と文献」『講座・大乗仏教７　中観思想』春秋社，東京，pp. 1-83, 1982。
2008 『中観と空Ⅰ　梶山雄一著作集第四巻』御牧克己編，春秋社，東京，2008。
2013a 『仏教思想史論　梶山雄一著作集第一巻』吹田隆道編，春秋社，東京，2013。
2013b 『認識論と論理学　梶山雄一著作集第七巻』吹田隆道編，春秋社，東京，2013。

梶山雄一・丹治昭義
1974 『八千頌般若経』中央公論社，東京，1974。

熊谷誠慈
2008 『中観思想史研究—インド仏教からチベット仏教，ボン教への中観思想の展開—』学位請求論文，京都大学。

松本史朗
1982 「Jñānagarbha の二諦説」『仏教学』５，pp. 109-137, 1978。

1987 「カマラシーラ」『インド仏教人名辞典』三枝充悳編，法蔵館，京都，1987。
1997 『チベット仏教哲学』大蔵出版，東京，1997。

御牧克己
1982a 「頓悟と漸悟—カマラシーラの『修習次第』」『講座・大乗仏教第７巻　中観思想』春秋社，東京，pp. 217-249.
1982b *Blo gsal grub mtha'*. Zinbun Kagaku Kenkyusyo, Universite de Kyoto, Kyoto, 1982.

森山清徹
2012 「後期中観派の自立論証としての離一多性因による無自性論証とアポーハ論」『法然仏教とその可能性』法蔵館，京都，pp. 1(L)-54(L), 2012。

長尾雅人
1982 『摂大乗論 和訳と注解 上』講談社，東京，1982。
1987 『摂大乗論 和訳と注解 下』講談社，東京，1987。

野澤静証
1957 『大乗仏教瑜伽行の研究：解深密経聖者慈氏章及び疏の訳註』法蔵館，京都，1957。

Powers, John.
1992 *Two Commentaries on the Saṃdhinirmocana-Sūtra by Asaṅga and Jñānagarbha*, Edwin Mellen Press, Lewiston, 1992.
1993 *Hermeneutics and tradition in the Saṃdhinirmocana-Sūtra*, E. J. Brill, Leiden, 1993.
1998 *Jñānagarbha's Commentary on Just the Maitreya Chapter from the Saṃdhinirmocana-Sūtra: Study, Translation and Tibetan Text*, Indian Council of Philosophical Research, New Delhi, 1998.

沖　和史
1982 「無相唯識と有相唯識」『講座・大乗仏教８　唯識思想』春秋社，東京，

pp. 177-209, 1982.

鈴木健太
2008　『ハリバドラの『八千頌般若経』解釈方法—『八千頌般若経』第二章註釈部分を中心として—』学位請求論文。

谷口富士夫
2002　『現観体験の研究』山喜房仏書林，東京，2002。

塚本啓祥・磯田熙文・松長有慶
1990　『梵語仏典の研究 III 論書篇』平楽寺書店，京都，1990。

山口　益
1999　『般若思想史』ワイド版，法蔵館，京都，1999（初版は1951）。

資料について

本講録に提出した和訳文資料は，ハリバドラ（9世紀頃）の『八千頌般若経解説・現観荘厳の光』（*Abhisamayālaṃkālālokā Prajñāpāramitāvyākhyā*）中に見られる文章である。ハリバドラのその著作は，荻原本で995頁（V本で448頁）の非常に大部なものであるが，ここに訳出した部分は荻原本で18頁弱（V本で11頁）のほんのわずかな部分でしかない。

この個処は，『八千頌般若経』第十六章の「ものの真相」章の中に挿入されているものである（梶山，丹治訳 p.86）。そこで菩薩の真相と如来の真相がどうして同じであるかという疑問に答える形でハリバドラは，「一切の存在は一・多の自性を欠くから無自性である」という議論を挿入している。

この資料は，カマラシーラ作の MAP と BhK I からの引用で構成されているといっても過言ではない。そして，その内容は，MA，MAV の註釈書といった趣であるが，MAP の網要書といってもいい。そして分量的にも唯識思想批判が，なかでも無相唯識派批判が中心であると言っていい。それは，また，シャーンタラクシタ，カマラシーラが何故に MA，MAV，MAP を著述したかをハリバドラの目で確認し，ハリバドラ自身がどのようにかれらの思想を継承しているか，ハリバドラの思想的立場を理解するに適した内容になっていると言えよう。

ハリバドラ自身の見解を述べる文言は最後の部分に見られるほんの少しのものでしかない。しかし，そのわずかな部分は，ハリバドラの立場を鮮明にするものでもあるし，ハリバドラがシャーンタラクシタ，カマラシーラから継承している最も大事な点を明らかにしている点ともいえよう。また，本資料が『八千頌般若経』の註釈の中に挿入されている理由ともいえる。

又，逆に，ハリバドラ自身の文言の少ないことは，ハリバドラ自身がシャーンタラクシタ，カマラシーラの思想の忠実な継承者であったともいえよう。しかも，そのゆえにTib語訳だけの文献からでは彼らの思想理解に難渋していた筆者にとって，Skt原文（Tib訳もある）でシャーンタラクシタ，カマラシーラの思想を確認できたことは最大の成果といえる。

はじめに

松本史朗氏によって「瑜伽行中観派について」（『チベット仏教哲学』所収。1997年）が出版されてから早くも18年が過ぎた。「この論文は，『瑜伽行中観派』という学派の存在に疑問を提起しようとするものである」という書き出しで始まる本論文は，たいへん刺激的であり，多くの資料が渉猟され緻密な考察が展開された内容豊かなものであるゆえに，それ以前に出版されていた梶山氏の論文「中観思想の歴史と文献」（『講座・大乗仏教７　中観思想』所収。1982年）と重ね合わせれば，「瑜伽行中観派」に関する議論は終結したという印象をもった読者は多かったと思う。

「瑜伽行中観派」の基本的著作と考えられるシャーンタラクシタの『中観荘厳論』に少なからざる関心を抱いていた筆者は，その後，カマラシーラの『修習次第三篇』，さらにこのたびAAAを読む機会に恵まれ，両碩学によっても説明されずに残っている部分があることに気付いた。

「瑜伽行中観派」という名称は，インドにおいては，11世紀頃にラクシュミー（Lakṣmī）によって使用されたことをもって嚆矢とするようである。一方，チベットではすでにその２世紀も以前にイェシェーデ（Ye shes sde）が『見解の差別』（*lTa ba'i khyad par*）において初めて登場させているようである。いずれにせよチベットにおいて流布されて

いた用語と同種のものがインドにも存在していたことは確かといえよう。しかし，「瑜伽行中観派」なる学派がインドにあっていかなる思想をもち，活躍していたかを知る資料はインドにもチベットにも十分とはいえないであろう。

学派名をサンスクリット語で確認できないのは残念至極であるが，チベット語から還元された Yogācāra-Mādhyamika なる言葉に適わしい思想を持った学者達が，9世紀以前のインドに存在したことは間違いないと思える。

〔中観派と瑜伽行派の〕二つの学説の馬車に乗って，教義の手綱を取る人々は，それゆえ，文字通り大乗教徒の地位を得る。(MA, k.93)

とシャーンタラクシタが語っていることによっても想像できる。その代表的学者として，ジュニャーナガルバ（Jñānagarbha, 8世紀），シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita, 725—784頃），カマラシーラ（Kamalaśīla, 740—797頃），ハリバドラ（Haribhadra, 800頃）たちを挙げることができるであろう。

それでは，彼らはいかなる思想をもっていたのであろうか。外界実在論→唯識思想（有相唯識→無相唯識）→中観思想と次第向上する教相判釈を共通認識とした学派であったと，「瑜伽行中観派」を定義しておこう。外界の実在を否定し，一切を唯心に帰し，その心をも勝義としては無自性である，という空の思想を最終目標とする哲学体系を持つ。その中で，唯識説を高く評価しつつも，最終目標の空思想へ至る方便説としているところに特色があるといえよう。この哲学を仏教に伝統的な止・観による修行道の体系，とりわけ「観」の成就の中に援用している。彼らが，また，『入楞伽経』『般若経』，ナーガールジュナの諸文献を主たる教証，理証として利用していることにも注意したい。このように，哲学と修行の両体系によって大乗の仏道を8～9世紀のインドにおいて開示したのが，「瑜伽行中観派」であったといえよう。

結論を先取りする形で代表的四論師の立場を略述しておこう。

ジュニャーナガルバは，上記教相判釈を初めて明示した点で本学派のフロントランナーといえよう。チベットの「学説綱要書」で異なる思想家像が述べられているのは，当時の中観派，唯識派諸論師のさまざまな教義を咀嚼して自己の思想体系を提示しようとしたからかもしれない。唯識派の基本文献である『解深密経』への関与にもそのあとを見ることができよう。

シャーンタラクシタは，インド哲学についての該博な知識を有し，ダルマキールティ（Dharmakīrti, 600—650頃）の影響のもと認識論，論理学を駆使して空性論証に尽力した第一人者であったといえよう。

カマラシーラは，師シャーンタラクシタが構築した空性論証に，仏教に伝統的な止・観の行法を導入し空性の世界を明らかにした。シャーンタラクシタの残した著作では思所成の慧の獲得の記述に留まり，修所成の慧の獲得までを示す，すなわち，中観派の修道体系の開示が必要であると考えた論師であったといえるかもしれない。

この両者が，『入楞伽経』（X, 256—258）を重要視し瑜伽行中観派の教相判釈を確立したことは間違いのないところであろう。

ハリバドラは，AAA の叙述に拠る限り，その思想はシャーンタラクシタ，カマラシーラのそれを全面的に継承した論師といえよう。その上で，無相唯識派の勝義諦についての理解をきびしく否定する点に

特色のある人物であった。「不見」(adarśana) という考え方に究極的立場を見出している点で，瑜伽行中観派の中観派的要素を一層鮮明にした論師であったといえよう。

チベットの学説綱要書の解説と照合するならば，四論師とも中観派スヴァータントリカ (Svātantrika, 自立派) の瑜伽行中観派に配当されている点は正しい。しかし，ジュニャーナガルバの配当はさておいて，シャーンタラクシタ，カマラシーラを形象真実派に配当したり，ハリバドラは形象真実，形象虚偽派の両派に位置付けられるのは正しいとはいえない。そもそも，『中観荘厳論』を読むならば，シャーンタラクシタは，有相唯識派も無相唯識派も批判し，また，ハリバドラはきびしく無相唯識派を批判して空性の世界を最終目標としているゆえ，彼らがそれらに配当されるのは奇妙なことである。チベットの学説綱要書の著者たちは，『中観荘厳論』を正確に理解していなかったのではないかとさえ訝りたくなる。

第一章　学説綱要書に見られる論師

それでは，ここで，「瑜伽行中観派」という学派名の由来，この学派を担ったとされるジュニャーナガルバ，シャーンタラクシタ，カマラシーラ，ハリバドラ等の諸論師の中観派における配置等をチベットの「学説綱要書」(宗義書) から学ぶことにしたい。尚，以下の記述は，畏友安間剛志氏が，御牧 [1982, 1983]，熊谷 [2008] の業績を整理しまとめた成果 (私家版) を借用して紹介するものである。

(1)　インド仏教文献に見られる中観派分類

インドにおける中観派区分は11c あたりに定着したようである。「自立派」(rang rgyud pa)・「帰謬派」(thar ‘gyur ba) の区分はインド文献上では確認されていない。

1．バヴィヤ (Bhavya, 8c 後半)『中観宝灯論』

┌“粗い外なる中” (phyi rol gyi dbu ma rags pa)
└“細かい内なる中” (nang gi dbu ma zhes bya ba phra ba)

2．ラトナーカラシャーンティ (Ratnākaraśānti, 10c 末～11c 初頭)『三乗の設定』

中観派┬“「世俗は知識の形象である」と主張する者” (kun rdzob

shes pa'i rnam par smra ba)

└"「世俗は習気である」と主張する者" (kun rdzob bag chags su smra ba)

3．マイトリーパ (Maitrīpa or Advayavajra, 10c 末～11c 中葉)『真如宝環』

中観派┬"如幻不二論者" (māyopamādvayavādin, sgyu ma ltar gnyis med du smra ba)

└"一切法無住論者" (sarvadharmāpratiṣṭhānavādin, chos thams cad rab tu mi gnas par smra ba)

4．ラクシュミー (Lakṣmī, 11c 初頭)『五次第の意味の解明』

┬経量部中観派 (mdo sde pa'i dbu ma)

├瑜伽行中観派 (rnal 'byor spyod pa'i dbu ma)

└般若経の中観派 (rgyal ba'i yum gyi dbu ma)

(2) チベット「学説綱要書」(宗義書) に見られる中観派分類

一方，チベットにおいては，インドで中観派分類の用語が確認される２世紀も以前に (i.e. Lakṣmī の11c の著作以前に)，イェシェーデ (Ye shes sde, 9 c 初頭) が『見解の差別』(*ITa ba'i khyad par*) において，「経行中観」(mdo sde spyod pa'i dbu ma)・「瑜伽行中観」(rnal 'byor spyod pa'i dbu ma) という中観派区分を初めて用いている。そして，ニマタク (Pa tshab Nyi ma grags, 11c) の著作中にインド文献には確認されない「中観自立派」(dbu ma rang rgyud pa)・「帰謬派」(thal 'gyur ba) の中観派区分が出てくる。チベット人たちも自覚しているように，これら「自立派」(rang rgyud pa)・「帰謬派」(thal 'gyur ba) という用語はチベット人自身によって作られたものであるようである。ツォンカパ (Tsong kha pa, 1357—1419) やシャーキャチョクデン (Śākya mchog ldan, 1428—1507) はこのことをはっきりと述べている (Mimaki, 1983, p.164)。

14c のツォンカパの頃には，これらチベットで成立した「自立派」・「帰謬派」という中観派の分類が，元来別次元での区分法であった「経行中観」・「瑜伽行中観」という分類と統合されていく様子が伺える。そして，ヤクトゥン (g-Yag ston, 1350—1414) の著作中には，「経行中観」・「瑜伽行中観」という分類が「自立派」のもとに置かれる。この頃にこれらの用語の統合が定着したようである。この頃，さらなる中観派分類の細分化が見られ，ポドンパンチェン (Bo dong pang chen Phyogs las rnam rgyal, 1376—1451) は「瑜伽行中観」を「形象真実派」(rnam bden pa) と「形象虚偽派」(rnam rdzun pa) に分類している。ジャムヤンシェーパ ('Jam dbyangs bzhad pa, 1648—1722) の時代には，「形象虚偽中観」(rnam rdzun dbu ma) が「有垢論者」(dri ma dang bcas par 'dod pa) と「無垢論と入口の等しい者」(dri ma med pa dang sgo bstun pa) に細分されている。19c の無宗派運動の代表者であるコントゥル (Kong sprul) は，「顕教中観」(mdo dbu ma) と「真言中観」(sngags kyi dbu ma) の区分や，「他空中観」(dbu ma gzhang stong) の細分化を行うなど，さらに中観派区分の細分化が進む。

1．イェシェーデ (Ye shes sde, 9 c 初頭)『見解の差別』

┬"経行中観" (mdo sde spyod pa'i dbu ma)：バーヴィヴェーカ

└"瑜伽行中観" (rnal 'byor spyod pa'i dbu ma)：シャーンタラクシタ